

北海道にとつての国際交流

～その意義を問い合わせ～

社団法人 北海道未来総合研究所

理事長 原 勲

一、国際交流の新しい視点

国際交流とは

北海道の国際交流を考えるために、まず国際交流とは何かを論じなければならない。国際交流は英語では *The international exchange of 「・・・」* と表現するよう、「・・・」を国際間で交換するという意味である。国際間で交換するものは今日的にはヒト、モノ、カネ、時間、情報などを主たる要素として挙げることが出来る。たとえば国際間ににおけるヒトの交換は典型的な人的国際交流であり、それは外交などから交換留学生のような形態に至るまで多様である。ヒト以外の要素も交換によって国際交流の形態として説明することが出来る。

国際交流の理念

国際間の交流はその基本理念として国際交流主体が相互に利益をもたらすものと期待されている。たとえば近代経済学の祖アダム・スミスやリカードの自由貿易論は一方的に利益が特定の国の国王や貴族などの特権階級の私益にならないことを目指して展開された。自由な市場を前提とした国際交流は当事者双方に支配服従のような関係があつては成り立たないのである。

その意味で国際交流論は平和論の領域に位置し、平和の対岸にある戦争、紛争、緊張などの国家関係の中では真の国際交流は育たない。その意味で国際交流の概念は、これまで多くの場合正の評価を勝ち得てきた。

グローバル化

ところで近年国際化がグローバル化 (globalization) という用語で表現され、国際交流のこれまでの理念やイメージもまた大きく変容を迫られている。グローバル化という用語はマーシャル・マクルーハンが一九六二年の著書「グートブルグの銀河系」でグローバルビレッジ（地球村）という用語を使つたことによつて知られた。マクルーハンは電子的なマスマディアが印刷機に代表される旧来型のメディアの時間的、空間的限界を突き抜け、地球全土がひとつの村になると述べた。今日の世界は彼の予言に近い形となり、とくにインターネット

トの急速な普及によつて地球上もしくは宇宙の彼方にあつても寸時にコミュニケーション可能な世界となつた。

今や電子媒体はユーチューブやウイキリース問題に見るよう個人の情報発信によつて世界が一気に振り動かされるまで進展した。このような巨大なグローバル化の進行の波に国際交流は如何なるスタンスで対応するのか答えを出さなくてはならない。

第二のグローバル化進行要因は世界市場を巡る巨大企業の覇権争いの帰結である。企業が市場競争を前提とする限り勝ち残る企業は巨大化し、それが出来ない企業は消滅する。

企業はそのため資源、生産、加工、流通、販売の全ての面で最適化を求めて行動し結果グローバル化する。

それらは企業の中枢ネットワークとして巧みに組み込まれ、他方で第一次産業のような脆弱な産業や零細な中小企業はその下敷きとなり、ほとんど存在力を持たなくなるほど弱体化してきた。

このような産業や企業は辺境の地方圏に張り付いていることもある、世界的に地方の衰退が進行している。これはグローバル化の陰の部分であり、国際交流がかつてのように正の評価だけで語られなくなつた要因である。

グローバル化の負の部分をいかにして打開するかは新たな国際交流のあり方を問う重要な鍵でありこれに答えを出さなくてはならない。

新たな時代、新たな国際交流

結局グローバル化のもとでの国際交流は国家の枠組みを一端取り外して(transnational) 考察する必要があること、また楽観的で明るい側面だけが強調されてきたこれまでの国際交流概念を変容させていくことになる。国家の枠組みに替わる何が国際交流の拠点になるのだろうか。それは地域(region)もしくは都市(urban)である。地域と都市は必ずしも同一ではないが都市は地域であり、地域は必ず都市を核とすると理解することができる。

先述したようにグローバル化そのものが国家の枠組みを超える意味を持つているのだから、ここでの表現はトートロジーに近いかもしれない。実はこのような説明を通じて国際交流の主役がまさしく地域や都市に明らかに移動した事実を強調したい。

では国際交流のベースにある要素の自由な交換という理念は今後どのように認識すべきであろうか。結論を言えばこれまでの国際交流の理念で前提とした市場経済原理主義は明らかに欠陥が多く、この理念に基づいた要素の自由な交換論も大きな修正が必要である。

貧富の差の拡大、資源争奪戦の増大、地球環境の悪化等々、予定調和的な世界觀が必ずしも通用しない現実を前にしているからである。ではそのような新

たな理念とは何であろうか。

それは公正や公平を基準とする「公共善」という理念である。地域の文化的、多様性をベースにしながらも、平和、正義、福祉、環境保護など地球的規模で望ましい方向を求める視点を地球市民が共有する理念であり、公の概念が空間的制約を超えて広がっていくことを意味する。ここでもコミュニティは接点として重要な役割を持つのであり、コミュニティとグローバルを改めて繋ぎ直すという次代の国際交流の使命と意義が浮かび上がってくる。

二、北海道の国際交流

歴史と遺伝子

北海道の国際交流は日本の最北辺に位置するという地政的な条件と中央集権的な律令制度の届かない日本文化の外にいた歴史をもつため、北海道以外の地とは極めて異なる特性をもっている。また日本の近代国家建設という重要な節目に至つてこれまた際だつてユニークな国際交流を経験した。

前者については五世紀頃から十三世紀頃にかけて先住民族アイヌが海獣狩猟や漁労を介して中国大陸を背景にサハリンとの間で活発な交易を行なつていた。北海道の先住者アイヌ民族は北海道・サハリン島・クリル島・大陸を結ぶ北の交易者だつたのである。

こうしてみると、北海道の国際交流はにわかなものではなく、それは理屈抜きで地域住民の生活と一体化したものであつた。北方世界を縦横に闊歩して暮らした先住民から、これから北海道の国際交流になお語り継ぐべきヒントがあるのでないかと考える。

明治新政府と北海道の国際交流

いうまでもなく北海道の国際交流を論ずる上で明治新政府の北海道開拓政策が果たした役割や意義を述べない訳にはいかない。

北海道開拓は拓殖移民政策という用語に象徴されるように未開の原野を拓き人々を移住させるという画期的な政策であり、この難事業を成功させるため、明治政府は外国人指導者を以て当てるという途方もないと思われる政策を実践する。

最高指導者黒田清隆は、戦略的に旧来の日本とは異なつた地として北海道を位置づける。開拓の任を委ねたニューアイランド出身のホーレス・ケプロンは、農業に秀でているだけでなく当時のアメリカの夢、フロンティアの体現者として北海道に新世界を築こうとした。

この開拓者精神とは「進歩は良いものだ」という精神、そして開拓技術等全てを含んでいた。北海道は食料生産の拠点であるが、寒冷地で稻作に向かないとして酪農と畑作を中心とした欧米型の機械化農業が開拓の中心に据えられた。これは日本の伝統的農業と異なるから北海道は日本ではない、新世界である。

との認識が後々の世代に伝えられていくのである。

世界に通用する人材の育成

北海道開拓政策で重要なのは開拓を担う人材の育成である。中でも札幌農学校（現北海道大学）の開設とその初代教頭にマサチューセッツ・アーモスト校農科大学長ウイリアムクラークを充てたことはやはり特筆すべきである。

「ボーアズビーアンビシヤス」で知られるクラークは、敬虔なクリスチヤンであるがその教育は実践的体験的で、生育している花々や草木あるいは岩石などを手に取つて教え、その由来から本質を考えさせるというやり方であった。クラークは全人教育を基本とし、自らも専門に捕らわれることなく全教科を教えた。新しい世界を築くためにはまず青年たちの心と体を作らなければならぬと考えて我が国初の軍事教練も取り入れた。

クラークはまた伊達からの移住者亘理（仙台藩）の家老田村顕光に粟や芋のように安いものを作つて内地へ売るよりは値の高い甜菜を作つた方が安定した収入が得られる等とアドバイスしている。

田村はクラークに売れる作物を作るにはどうしたら良いか助言を求めているが、田村はその後クラークの教えをヒントにして交通を便利にすること、販売組織を作ること、藍の工場や製麻工場、甜菜工場等北海道の適地としての農業を開発して行くのである。こうしてクラークは教室の徒としてだけではなく、産業にも秀でた実践家でもあった。

時代は後になるが世界列強の畜産・酪農の日本市場参入の圧力に対抗して農家を組織した黒澤西蔵や佐藤貢は、国際的な高い教養、精神、そして技術を身につけ、農業ベンチャービジネスから日本を代表する巨大企業を創出するのに成功した。

これは北海道が誇るべき時代、北海道だけに見た国際交流の画期的時代であった。

三、これから北海道・国際交流 自立で築く北海道

かつて司馬遼太郎は「日本史探訪」で北海道を歴訪した時、北海道が築き上げてきた壮大な実験を評価しながらも「北海道とはこんなものだつたのか」と彼が描いてきた北海道観と現実の差にやや慨嘆して語つたことがある（昭和四六年ＮＨＫテレビ）。今日北海道は開拓の時代から遠くなり、開拓を受け継いだ強烈な精神や情熱は失われたかに見える。

確かに開拓期の「血と馬と汗」の時代から「知と技術と科学」の時代へ北海道も転換した。政府公共投資はなお多いが、それでも今や北海道は名目総生産が米ドル換算で約二四〇〇億ドル、北方圏でも交流の深いフィンランドやデンマークをしのぐ大きな経済規模を持つまでになつた。

過去の歴史において誇るべきことが多かつた北海道の国際交流遺産を引き継ぎ、更なる飛躍のため何をなすべきか。自立する北海道の国際交流を築くための提案を述べて本稿の結論としたい。

北方圏構想をなお熱く

北海道の国際交流にとつて北方圏構想とそのための事業活動は極めて大きかつた。これは一九七一年にスタートした第三期北海道総合開発計画（一〇カ年）の中で北海道と同じように積雪寒冷の気候風土の長い歴史を持ち、高い文化を培ってきた北米、カナダ、北欧諸国などとの交流を通じて、北海道の産業経済、生活、文化の向上を図り、北国の風土に根差した北海道らしい地域づくりを進めていこうという構想である。

またこの構想は、北海道開拓以来の中央志向から転換する画期的なものであった。まさに国家による近代化の枠組みを脱却して地域自らの手で切り開こうというものであり、現代グローバリズム時代への地域のあり方を先取りしたものである。

推進母体は七二年の北方圏調査会から今日の北方圏センターに至るまで全国でもユニークな国際交流団体として活動し、道民の北方圏に所属するという意識の浸透に大いなる役割を果たしてきた。

一九九〇年代に入りグローバル化の進展とともに従来の北方圏諸国との交流のみならず広く世界との協力や交流に力を入れていくことになり、一九九五年、国際協力機構（JICA）の国際センター（札幌、帯広）の管理運営、一九九八年、地域国際化協会の一員の認定などによつて北海道の国際交流は多彩な活動を開することになった。

このような拡大発展は北方圏センター活動の必然的方向であり、二〇一一年には北海道国際交流・協力センター（仮称）への名称変更へと発展してきている。

ところでこのことが北海道の国際交流の最大の担い手である北方圏センターの心すべき事柄が出てくる。すなわち北方圏というエリアの限定性によつてその存在証明を得てきたものが、拡大する世界全体に拘ることによつてその特徴を失い、魅力を失う危険はないかという懸念である。

これは本来会員である道民としっかりと共有出来るものがどれほどあるかという点から評価すべきであり、具体的活動で示す以外にない。

しかしそれにしても北方圏構想の理念や北方圏交流事業は必ずどこかに且つ重要な位置づけをもつて存在させておくべきである。地域の国際交流に最も先端的な位置にある北方圏の中の北海道を今後も強化すべきであり、そこに北海道の国際交流の競争力があると考える。

国際交流の基本を中高校教育で

国際交流の中心的役割は何といつても人材の育成すなわち世界に通用する人を養成することである。それには中高校生に同じ世代の世界の若者と交流する機会を沢山持たせることが最も重要である。

日本の大学や大学院の留学制度はかなり深化してきているが、ことばの壁を乗り越えて海外との交流を深めるためにも中学高校の時代からの経験は重要である。この点に関し文部科学省の調査「高等学校等における国際交流などの状況について（平成一八年度）」によると、前回調査（平成一六年度）に比べて「外国人からの教育旅行の受け入れ」は一万七千七百四十三人から三万三百六十三人と約七割増、「外国人留学生（二カ月以上）の受け入れ」は約二割増、「英語以外の外国語開設」は開設学校数が約五割増加したとの報告書があり、日本の高校教育及び中等学校教育に国際交流が徐々に取り入れられようとしていることが分る。北海道の同種のデータを手元にしていないので正確な指摘はできないが、北海道教育委員会が発行しているホームページ「北海道の新しい高校づくり」を読む限りでは、高校教育への国際交流の必要性を強調する表現は発見できなかつた。

長年国際交流に力点を置いてきた私学の存在は承知しているが、北海道の高校教育全体の基本として国際交流の重要性が指摘されるまでには至っていないのであろうか。

グローバル時代の人材の育成に、北海道は遅れを取ってはならない。北方圏センター等は、学校教育をその専門とする行政組織が担当するのだという垣根を乗り越え、積極的に国際交流事業の機会を提供する努力を一生懸命行うべきだ。

いざれにせよ学校教育との連携によつて未来を担う若者達の視野を広げ、北海道から国際社会で活躍する人材の層を厚くして行きたい。

ギフトの経済学を実践する

公共善を実現する経済学はギフト（The gift）の経済学である。競争の論理ではなく共存の論理あるいは協力の論理による新しい経済学の考え方である。

企業は利益追求を唯一の目標にするのではなく多面的な目標たとえば環境や社会福祉、安全な社会、社会貢献、スマートビジネスの育成等を組み込んで活動する。

社会的企業、コミュニケーションビジネスや有名なグラミン銀行のマイクロ・クレジット活動などが典型である。一方、病院や学校や福祉施設など、利益を第一義的でない組織が世界のどの地域においても急速に必要となってきた。少子高齢化がこの流れに拍車をかけている。

しかしこのようなニーズが不可欠だとしても全て経営組織で解決するのは困

難で、結局、市民ひとりひとりの参加による社会的問題への対応が重要な鍵となる。このような社会的活動を北方圏センターが応援し奨励しているのは極めて時宜にかなっている。翻つてわが国の寄付行為が欧米に比べて少ないという批判が長く存在するが、阪神淡路の震災時に示された市民の助け合いの様々な活動は、通説を翻して画期的であった。

このような表層に出ない市民の賢明な精神の存在は世界に誇つて良いだろう。北海道も多くの若者が震災救済にはせ参じた。その後道民の意識や行動でどれほど他者への配慮や貢献に寄与しているのだろうか。

国際交流事業を通じてこれからグローバル社会を生き抜く道民のボランティア精神を更に喚起したいものである。

斬新なメッセージを発信する（宝探しとディベート）

結局北海道にとっての新たな国際交流は北海道が自身に対しても世界に対しても新たな時代に対応したメッセージを発することである。このメッセージは誇るべき国際交流の時代を持つ北海道にふさわしいメッセージとして伝えられるものでありたい。

実は、北海道から斬新なメッセージを発するのに北海道を良く知らなければならぬ。メッセージを発するのは己を良く知ることによつてしか生まれない。そのため二つのことを提案したい。

ひとつは「北海道の宝探し」を行うこと、もうひとつは、ディベートを盛んにすること、である。

前者は北海道の再発見、その過程は学習の過程であり、実学の精神であふれていたあのクラーク精神にも繋がるかもしれない。

北海道には遺産に登録されていない数多くの宝が足元に無限に広がっているはずであり、また地域に生きる喜びを人々に実感させるチャンスともなる。

後者はサンデルのいう地域コミュニティの再生、無縁社会からの脱出という問題提起と共通する。優れたディベートによつて他者を知り、とりわけ自己を強烈に認識する機会を得ることができる。あまり得意とは言われない日本人、北海道人に、ある意味では厳しい場を設ける。

ヴァーチャルではないこのリアルの場面を倦むことなく積み重ねる。結果北海道から斬新なメッセージが少しづつ世界に発信できるようになつて行けば、それは新たな北海道の国際交流の意義であり、地平となる。

参考文献

- 鈴木敏久編著「国際交流の諸相」（渓水社、二〇〇四年）
- 高橋直子「国際交流の理論」（勁草書房、一九九七年）
- 毛受敏浩「国際交流・協力活動入門講座」（明石書店、二〇〇三年）

マーシャル・マクルーハン著、高儀進訳「グーテンブルグの銀河系」（竹内書店）

ドナルド・シュール著、堀出一郎訳「グローバルに考える」（麗澤大学出版部）

原 純著「互恵と自立の地域政策」（文眞堂、一〇〇五年）

原 純著「新たな公による国土マネジメント」（計画行政、一〇〇七年）

田端宏著「北海道の歴史」（山川出版社、二〇〇〇年）

宮島利光著「アイヌ民族と日本の歴史」（三一書房、一九九六年）

ホーレス・ケプロン著、西島照男訳「蝦夷と江戸」（北海道新聞社、一九八五年）

司馬遼太郎著「日本史探訪」（角川文庫、二〇〇一年）

STVラディオ編「ほっかいどう百年物語」（中西出版、一〇〇二年）

札幌市教育委員会編「北都、その未来」（北海道新聞社、二〇〇一年）

北方圏センターホームページ

田村正勝著「ボランティア論」（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）

米山岳廣著「ボランティア活動の基礎と実際」（文化書房博文社、二〇〇六年）

寄付白書研究会「寄付白書二〇一〇」（日本経団連出版、二〇一二年）

ピーター・ドラッカー著、上田惇生訳「ポスト資本主義社会」（ダイヤモンド社）

ピーター・ドラッカー著、上田惇生訳「すでに起こった未来」（ダイヤモンド社）

マイケル・サンデル著、鬼澤忍訳「これからの正義の話をしよう」（早川書房）